

平成 28 年 5 月 22 日放送

富山教区 婦負東組 竹中了祥師

おはようございます。浄土真宗本願寺派 妙順寺の竹中了祥と申します。

浄土真宗では、本堂やお仏壇に親鸞聖人を絵で表した絵像といわれるものが掛けられます。古い絵像に、聖人七十歳のお姿を描いたとされる「鏡の御影」や、八十三歳の時とされる「安城の御影」があります。どちらも聖人のお姿が忠実に描かれているといわれます。私たちが平素、本堂やお仏壇にお掛けしている絵像と、この「安城の御影」では描かれているモノが違います。この「安城の御影」には、桑で作られた火桶や杖、草履が描かれています。聖人のお姿と一緒に描かれていることから愛用の品である推察できます。

草履を履いて道なき道を行き、時に冷えた手を火桶で温め、自身を支える杖を搦きながら長い距離を歩まれました。人生という旅路で、私たちは一体どこへ向かい、冷える心を何で温め、何を支えとして生きているのでしょうか。

あるお宅へ毎月のお参りに行った時のことです。仏間に向かって歩いて行くとツルッと滑り、しりもちを搦きかけました。すかさず「いつも床がピカピカですね～」と褒めてごまかしました。すると、お母さんがお父さんを指さして「いつか転ばないかなあと思って」とわるーい笑顔で言いました。お父さんは「保険もかけてないのに無駄なことをっ」と言い返していらっしやいました。夫婦の仲の良さがにじみ出た一幕でした。

人生の思わぬ出来事に備えて保険をかけておくことを「転ばぬ先の杖」といいます。転ばないように杖を突いて歩けば、転ぶことがないという喩えに由来する言葉です。

最近、人生の終わりのための活動という「終活」というものが流行っているそうです。自分のお葬式はどういう形にするのか、お墓はどうするのか、財産や相続の計画を立てておくなどの身辺整理をしておくことで残された家族に迷惑をかけないようにする活動のことをいうそうです。そのことをひとつのノートにまとめておく、エンディングノートというものがあります。いわば、具体的遺言書と言ったところですが。そのノートには、名前、生年月日、自分の歩んだ歴史、親戚・友人関係、貯金や財産、介護が必要になった時の資産管理、ペットの飼育のこと、希望する葬儀の場所や規模、埋葬方法などなど多岐に渡って書き込む内容があります。もしもの時のために伝えたいことをまとめておく、エンディングノートという“転ばぬ先の杖”です。

歳を重ねていくにつれて、自分の体がいふことを聞かなくなります。いよいよ老いを感じたときに、多くの方が自分の終わりというものを意識し始めるように思います。そして、転ばぬ先の杖の用意を始めます。葬儀の形やお墓のこと、財産の分与などの終活が人生最後の最重要課題になっているように感じます。

仏教では、人生の最重要課題を終活というものにはしません。仏教でいう最重要課題は「仏に成る」ということです。その目的は、人生を実りあるものにするためなのです。

仏説無量寿経に「大命將に終わらんとするに悔懼こもごも至る」ということばがあります。「大きな命をあたわっている私が、この命を終えるときに、後悔とおその感情がグチャグチャになって襲ってきますよ」という意味です。これは、本当に命を大事に生きているのか、命の行き先を考えているのかと釘を指す厳しいことばです。

仏教は、その生き方で正しかったのかを問いかけてます。それは人生への否定ではなく、真実の人生の実りというものに気づいてもらうためです。葬儀をどのような形にするのか、お墓はどうするのか、遺産の相続はどうするのかなど、終活ということも考えなければならぬことのひとつではありますが。しかし本当に大事にしなければならないのは、一体どこへ向かい、何を支えとして生きているのかを問いに持つことです。それは一度きりの命を歩みきることに於いて、自分の人生という道の確認でもあります。

哲学者である森岡正博氏は人生についてこう言われます。

「悔いのない人生を生き切るとは、いまの私の存在をつねに自己肯定できるように生きることでもあると私は思う」

生きていく中で、「こんなはずじゃなかった」「なんでこんなメに…」と思いつ通りにならないなあという感覚をもつことがあります。首を横に振り、納得いかない人生を送るのではなく、よろこびあふれるうなずきの人生を送りたいものです。

何を支えとして生きているのか。どこに向かっているのか、人生の最重要課題は一体なにであるかを仏教から学ばせていただきたいと思います。

「なもあみだぶつ」というお念仏の杖が、今日もまた転んでばかりいる私の人生を支え続けています。